

張潮の書簡に見られる『檀几叢書』の編集状況について

小 塚 由 博

はじめに

1. 『檀几叢書』について
 2. 書簡に見られる『檀几叢書』の編集状況について（一）——作品の贈呈とその依頼——
 3. 書簡に見られる『檀几叢書』の編集状況について（二）——共編者王暉の場合——
- おわりに

はじめに

筆者はこれまで清初の江南における文人の交遊状況について、張潮とその友人たちとの間で交わされた書簡を手がかりとして考察を重ねてきた。とりわけ張潮が編纂した3種の叢書（『虞初新志』『檀几叢書』『昭代叢書』）の編集に際しては、様々な友人たちとの間で活発に書簡が交わされ、その様子がかなり詳細に描かれている。そこで前号¹ではその叢書の一つ『虞初新志』編集に関わる書簡からその状況について論じた。ここでは『虞初新志』の寄贈やその依頼、また

掲載作品の収集や寄贈、ひいては『虞初新志』の成り立ちに関わるものに至るまで、様々な書簡を例に挙げて考察した。本論では3種の叢書のうち『檀几叢書』に關する書簡を取り上げることとする。『檀几叢書』は張潮と友人王暉の共編の叢書で、『虞初新志』とはまた趣を異にする作品が収められている。また、『虞初新志』やもう一種の叢書『昭代叢書』とも編纂時期がほぼ重なっており、各叢書間の關係を探る上でも重要な叢書である。同時にそこで交わされた書簡中にも、その各叢書の編纂過程がかなり詳細に記されており、これを丹念に解讀し、事實關係を解きほぐしていくことによって、張潮とその周邊の文人たちとの交遊關係の一端が浮き彫りになってゆくのではないか。ひいては、當時の文人たちの文化活動について、その實態の一側面を窺う事が出来るのではないかと考えている。

1. 『檀几叢書』について

①張潮と『檀几叢書』

張潮について詳しくは先行研究²⁾を参考にされたいが、以下簡單に見ておこう。

張潮（一六五〇—一七〇九？）字は山來、號は心齋居士・三在道人。安徽歙縣（新安）の人。科擧に應ずるも受からず、後仕官の道を諦めて揚州に遷り、出版活動に力を注ぐようになった。父は進士で山東提學僉事であった張習孔で、雅號でもある詒清堂という版元を所有していた。張潮は本論でも取りあげる『檀几叢書』をはじめ、『虞初新志』『昭代叢書』の叢書の編纂者としても知られ、また警句集『幽夢影』の作者としても有名である。その他、著に『心齋聊復集』『心齋詩集』『心齋雜組』『古文尤雅』『詠物詩』などがある。

先に示した通り、張潮は當時流行し多數制作された小品文（文言小説や筆記作品など短編の文章）を集めた3種の叢

書『虞初新志』『檀几叢書』『昭代叢書』を編纂している。³⁾ その内の一つで本論の中心である『檀几叢書』は初集五十卷(二卷一作品で計50作品)、二集五十卷(同50作品)、餘集上・下卷(上卷三〇作品・下卷二十七作品、計57作品)からなり、112名の人物の作品計157作品が収録されている。

その代表的な作者(作品数)としては、張潮(9)、程羽文(6)、丁雄飛(5)、王暉(4)、宋瑾(4)、尤侗(4)、王士禛(3)、徐士俊(3)、黃宗羲(2)、毛先舒(2)、黃周星(2)、黎遂球(2)、鈕琇(2)、閻若璩(1)、陸次雲(1)、狄億(1)、毛際可(1)等であり、當時の著名人も少なくない。またその作品は、例えば徐士俊「三百篇鳥獸草木記」、「月令演」、黃宗羲「歷代甲子考」、徐汾「二十一史徵」、宋實穎「黜朱梁紀年論」、金諾「韻史」、洪若皋「釋奠考」、繆彤「臚傳紀事」、毛先舒「喪禮雜說(附常禮雜說)」をはじめとして、莊臻鳳「琴聲十六法」、陸圻「新婦譜」、徐震「美人譜」、余懷「婦人鞋襪考」、張潮「酒律」、諸九鼎「石譜」、張綱孫「獸經」、陳鑑「江南魚鮮品」、(以上初集)、閻若璩「孟子考」、崔學古「幼訓」、黃宗羲「七怪」、金人端「念佛三昧」、王士禛「漁洋詩話」、王槩「學畫淺說」、丁雄飛「小星志」、張仁熙「雪堂墨品」、周高起「陽羨茗壺系」(以上二集)、陸次雲「山林經濟策」、宋起鳳「家塾座右銘」、江之蘭「香說齋樂事」、尤侗「豆腐戒」、程羽文「詩本事」、毛際可「燈謎」、徐士俊「婦德四箴」、尤侗「負卦」、孫蘭「古今外國名考」、黃百家「明制女官考」、梅文鼎「南極諸星考」、成性「選石記」、沈士瑛「美人揉碎梅花迴文圖」、曹之璜「西湖六橋桃評」、王暉「課婢約」(以上餘集)と文體も内容も多種多様な作品が収められている。

前號で述べた『虞初新志』は文言小説を中心に收められた作品であり、その意味では『檀几叢書』はそれとは趣を異にする叢書と言ってよいであろう。ただし、大きく見れば、これらは大體短編の作品であり、當時流行した所謂小品文の類を集めた叢書としては共通している。

②3種の叢書の編集期間

『檀几叢書』と『虞初新志』についても一つ共通しているのは、同時代の作者の作品をほぼリアルタイムに随時収集・採録している点であろう。そして、更にもう一つ特筆すべきは、この三種の叢書がほぼ同時期に順次編集出版されていることであり、場合によっては叢書間で作品の移動や調整が行われていたことであろう。その編集の状況について簡単に並べると以下のようなになる。

- 『虞初新志』〈八卷まで〉—康熙二十二年（一六八三）年
『檀几叢書』〈初集〉—康熙三十四（一六九五）年
『昭代叢書』〈甲集〉—康熙三十五（一六九六）年
『檀几叢書』〈二集〉—康熙三十六（一六九七）年
『檀几叢書』〈餘集〉—康熙三十七（一六九八）年？
『虞初新志』〈九卷〜十二卷まで〉—康熙三十七（一六九八）年？
『虞初新志』〈十三卷〜二〇卷〉—康熙三十九（一七〇〇）年？
『昭代叢書』〈乙集〉—康熙三十九（一七〇〇）年
『昭代叢書』〈丙集〉—康熙四十二（一七〇三）年

以上のように、一六八〇年以降、特に一六九五年から一七〇〇年ごろにかけて立て続けに叢書が編纂刊行されており、その作業に追われていたことがわかる。そして、その直中に編纂されたのがこの『檀几叢書』といえることができる。

③『檀几叢書』の序文・凡例

『檀几叢書』各集にはそれぞれ序文と凡例（餘集を除く）が附されており、一覽にすると以下の通りになる。

初集—張潮「檀几叢書序」（康熙乙亥〔三十四〕〔二六九五〕年）七夕新安張潮題於揚州之詒清堂、吳肅公「檀几叢書

序」（宣城街南吳肅公拜撰）、王暉「檀几叢書序」（仁和王暉題於松溪書屋）、王暉「檀几叢書凡例」（松溪王暉

識）

二集—王暉「檀几叢書二集序」（仁和王暉丹麓撰）、張潮「檀几叢書二集序」（新安張潮山來撰）、王暉・張潮「檀几叢

書二集凡例」（丁丑〔二六九七年？〕九日王暉張潮同識）

餘集—王暉「檀几叢書餘集序」（武林王暉丹麓題）、張潮「檀几叢書餘集序」（新安張潮山來題）

殆どは編者の張潮・王暉の手によるものであるが、一つだけ張潮の友人吳肅公（一六一六—一六九九。字は雨若、號は晴岳・街南。安徽宣城の人）が制作した「檀几叢書序」（初集）がある。その一文を擧げておこう。

物之生萬有不齊、必有以彙而叢之、使不散忘、而後用之者得取裁焉。武庫者五兵之所叢也。庖厨者百味之所叢也。惟書亦然。好古之士、悉其才智之所及、見聞之所撫、或史之緒餘、或子之支分、或九流之副、稗史之遺、山崖屋壁之藏、窮簷陋巷之述、哀談脛語、非有盈尺之部、可以孤行。是賴於彙而存之者矣。愚所知叢書自漢魏而外、若古今逸史・說郛・說海・稗海・祕笈。載籍諸書、不下數十種。顧時代既遷、著述家日益富。前者刊落而後者踵增、將不知其紀極。

臨安王子丹麓、因有叢書之役、向以未能問世爲憾。張子心齋、虞其散佚也。復網羅而加廣之、且公諸天下焉。嗟夫、兩君之間見博矣、其用力勤矣。…。

(萬物が生ずる際は均しく生ずるわけではない。必ず集めてこれを纏め、散逸させないようにし、その後これを用いる者が取得裁断することが出来るのである。武庫とは五兵が集まる場所であり、庖厨とは百味が集まる場所である。思うに書物もまた同様である。古を好む士人は、その才知や見聞の及ぶ限りを盡くすが、(それは)或いは歴史の緒餘、或いは諸子の支分、或いは九流の副次、稗史の遺物、山崖屋壁の所藏、窮簷陋巷の記述、哀談脛語したものであつて、長編の作品ではなく、單獨で刊行されて、集める人に頼つて存在するものである。私の知っている叢書は、『漢魏(叢書)』以外に、『古今逸史』『說郭』『說海』『稗海』『陳眉公』秘笈』で、採録する諸書は數十種を下らない。顧みれば時代は既に遷り、著述家は日に日に多くなつた。前の者は削除されても、後の者は先人を繼承して輝きを増し、またその際限を知らない。臨安(杭州)の王子丹麓(王暉)は叢書編纂の事業があるのに、ずっと未だ世に問う(出版する)ことができないのを遺憾に思つていた。張子心齋(張潮)は、それが散佚するのを危惧してゐた。また(これを)網羅して廣め、その上これを天下に公にする。ああ、兩君の見聞たるや博く、その力を十分に盡くした。…)

吳肅公は、作品を世に残したいが様々な事情で成し遂げられない王暉と、作品が後世に傳わらず失われてしまう事を恐れた張潮とがうまく組み合わさつて、『檀几叢書』編纂に繋がつていったことを述べている。

④ 『檀几叢書』各序文・凡例に見られる編集狀況

凡例は前述の通り初集および二集に付されているが、餘集には付されていない。初集の凡例は王暉の作で、二集の凡

例は王暉・張潮の連名で記されている。初集・二集の凡例（選例）はともに五段落に分かれている。王暉と張潮はこれら『檀几叢書』の序文及び選例において、編集の経緯や情況、方針等について言及している。その要點を纏めると以下のようになる。

一、もともと『檀几叢書』は王暉が一人で作品の採集・編集を行っていたが、一六九四（康熙三十三年）の初夏に張潮と西湖近邊で會見し、そこで編集・出版に關する打ち合わせを行った。その結果張潮の援助・協力を得、以後張潮と協同で作業を行うこととなった。

二、王暉が集めた作品はまだ叢書としては數が足りず（一作品を一巻として全五十巻）、張潮が自身の所有していた作品を提供して『檀几叢書』初集が完成し、出版された（一六九五年）。

三、張潮はこの『檀几叢書』に觸發され、自身の所蔵していた作品を集め、翌一六九六（一六九六）年『昭代叢書』甲集が編纂された。

四、叢書は海内の文人たちの間に傳わり、噂を聞いた作家たちが叢書に掲載して貰おうとこぞって自身の作品を張潮・王暉の元に送ってくるようになった。やがて多くの作品が集まり、そこで『檀几叢書』二集の刊行を計畫し、出版された。更にそれだけでは足りず、餘集も編纂し出版することとなった。

五、編集作業はそれぞれ王暉は杭州、張潮は揚州を據點として行われ、選定や校訂作業が行われた。その實務的なやりとりは主に書簡によって行われ、月に2、3回のペースで往復された。

中でも注目すべきはやはり同時進行で作品が集められ、編纂作業が行われている點であろう。そしてその際大きな役

割を果たしたのが書簡とその傳達者である。

2. 書簡に見られる『檀几叢書』の編集状況について(一)——作品の贈呈とその依頼——

本論では友人が張潮に寄せた書簡を集めた『尺牘友聲集』(全十五卷)と、張潮が友人たちに寄せた書簡を集めた『尺牘友聲偶存』(全十一卷)を使用するが、それぞれの詳細については拙論を参照されたい。

なお、本稿では便宜的に『尺牘友聲集』を『友聲』、『尺牘友聲偶存』を『偶存』と稱すこととし、更にそれぞれ拙稿「張潮『尺牘友聲集』『尺牘友聲偶存』研究資料編」の通し番號を振った。

『檀几叢書』に關する記述のある書簡は、『友聲』(友人↓張潮)では66通、『偶存』(張潮↓友人)では48通存在する。その登場年代を見ると、『友聲』の場合最も古いのは458王暉が寄せた書簡(己集・一六九四年)で、最も遅いのは1010程瑞祊の書簡(新集五卷・一七〇五年)であり、『偶存』の場合は、最古の書簡は冒丹書への書簡(114「寄冒青若」〈卷三〉・一六九四年頃)で、最も遅いのは王暉への書簡(「寄王丹麓」〈卷十〉・一七〇二—三頃)である。なお、文末に關連表(1—3)を附したので、適宜参照されたい。

①叢書の贈呈とその依頼について

a. 贈呈(張潮↓友人)

張潮は様々な文人たちに『檀几叢書』を始めとした自編の叢書を贈呈している。それは後述の通り相手からの求めに應じた場合もある。例えば、張兆鉉^①、黃雲、孔尙任^②、王士禛^③、毛際可に寄せた書簡など多數に贈呈の記述見られる。具

體的には、黄雲（一六二二—一七〇二）。字は仙裳、號は舊蕉。江蘇泰州の人）に寄せた書簡では「檀几叢書一部、韻籌一副、聊以伴函。統希崇照（『檀几叢書』一部、「韻籌」一對、僅かながらお附けいたします。どうぞご覧下さい）」と記しているし、毛際可（一六三三—一七〇八。字は會侯、號は鶴舫。浙江逐安の人）への書簡には「…先集四部郵呈台覽。又拙刻數種有與丹兄共事者、有自爲一集者并呈教。到日伏惟檢入是荷（先集四部お贈りしますのでご覧下さい。また拙刻數種に丹兄〈王暉〉とともに作業を行い、一集にしたもの〈『檀几叢書』もあわせてお贈りします。お手元に届きましたら、どうぞご査收下さい）」云々とある。

b. 贈呈の依頼（友人↓張潮）

一方で『檀几叢書』はしばしば書簡に見られるように、當時の文人たちの好評を博したようで、しばしば贈呈の依頼を受けている。例えば、江之蘭、史申義^⑤、聶先、曹之璜^⑥、蘇全許^⑦、錢嶽、黄雲^⑧、費錫璜、余蘭碩、陳鼎等から寄せられた書簡に見られる。いくつか例を挙げよう。

江之蘭（？—？）。字は含徵、號は文房。安徽歙縣の人）は「…其逸民四史・奕乘・禽史・檀几叢書・禪世説・仙世説、此數種弟所酷欲見者、檢付爲望。…（その『逸民四史』『奕乘』『禽史』『檀几叢書』『禪世説』『仙世説』は私がぜひ見たいと切望しておりました。お寄せ下さることを願っております）」と寄せている。

また、費錫璜（字は滋衡、四川成都の人）は張潮に書簡を寄せ、

前捧讀尊著二種。數日不能釋手、如入巖谷而啖芝草、氣味俱別。直與眉山小品並稱藝苑雙絕、近日仲醇笠翁、瞠乎後矣。何快如之。更有懇者、向於友人處見檀几叢書・下酒物兩種、尤屬案頭不可闕之書。欲奉求裝爲祕玩。知先生

必不我吝也。²⁰⁾

(先に尊著二種を奉讀致しました。數日間〈書から〉手を離すことが出來ず、まるで巖谷に入つて芝草を食らうように、気分は格別でした。まさに眉山〈蘇軾〉の小品と竝んで藝苑の雙絶で、最近の仲醇〈陳繼儒〉、笠翁〈李漁〉も目を見張ることでしょう。何と氣持ちのよいことでしょうか。更にお願ひしたいのは、以前友人のところで見た『檀几叢書』と『下酒物』兩種の事で、最も机上に不可缺な書物です。頂戴して裝丁し、ひそかに愛玩したいと思います。先生は必ず惜しむことがないと信じています)

云々と述べている。

c. 「投げ返された」叢書

一方、同宗の某(姓名不詳)に寄せた長文の書簡には以下のように記している。

∴。唯檀几叢書二集、俟榮行時、留以爲贖。蓋緣皂囊羞澀、不得已而出于此耳。今既以凱旋爲少、遂以檀几叢書二集奉上。不謂遽蒙擲還。且面語小价云、此書止可賣二十文錢、買不上幾斤麩。∴。僕初集一書、頗王阮亭先生所賞、且種種大著見寄。因有二集乙集之役。今足下乃謂竝非名筆沽之書肆、即求一文亦不可得。

(∴。ただ『檀几叢書』二集をへあなたが)お出かけになるのを俟ってはなむけとさせて頂いたのは、懐具合が悪いため、やむを得ずこれを出した次第です。今既に「我が」凱旋「詩」は在庫が少ないので、結局『檀几叢書』二集を奉上致しましたが、思いがけずすぐに投げ返されてしまいました。その上、私の使用人に「この書はたった

二十文錢でしか賣れず、數斤の麥粉も買えない」と面罵された由。∴。僕の『檀几叢書』初集は、たいへん王阮亭〈王漁洋〉先生にご好評を頂いた書物で、しかも種々の大著を寄せられました。ですから『檀几叢書』二集、『昭代叢書』乙集の編集が有るのです。今あなたはみな名筆でなければ書肆に賣ってしまおうとお思いでしょうが、一文を求めても得ることはできません。∴)

この「同宗の某」がどのような人物かは不明であるが、何かしらの商賣に關わる人物だったのか、『檀几叢書』の價値が分からず戻され、張潮が再度説得する様子が窺える。

d. 「奪われた」叢書

なお、贈呈の依頼の中には、『檀几叢書』が他者に奪われたため、もう一度賜るよう依頼するケースがしばしば見られる。例えば、余蘭碩（一六六五？—？）。字は香祖、號は少霞・湘客。福建莆田の人。余懷〈字は澹心〉の子）からの書簡に、

∴。前承寄十兄轉惠檀几叢書、爲敝郡徐用王先生得去。旅中寂寞無書可觀。幸先生勿笑蠹魚之貪、再賜一部則勝錫百朋矣。∴)

(∴。先に十兄〈錢嶽、字は十青。江蘇蘇州の人〉から『檀几叢書』をお寄せ頂きましたが、敝郡の徐用王〈徐貞、字は用王、江蘇常熟の人〉先生に持って行かれてしまいました。へですから旅の途中に寂しくても讀むべき書がございますでした。幸いに先生には我が蠹魚の貪をお笑いにならず、またもう一部頂ければ財寶を賜るよりも勝

ります。…)

とある。これに關連する記述が錢嶽の書簡にも見られる。まず錢嶽は『檀几叢書』を張潮より貰い、その謝意を述べているが、その後寄せた別の書簡で「其檀几爲同社汪履九先生強爲奪去。故余湘老札中鳴謝及之耳。(その『檀几叢書』は同社の汪履九先生〈不詳〉に強引に奪い去られてしまいました。ですので、余湘老〈余賓頓〉がたいへん感謝したのです)」と記している。これは類似のケースであろうか。

また黃雲(一六二一—一七〇二。字は仙裳、號は舊樵。江蘇泰州の人)が張潮に寄せた書簡に、「不知檀几叢書之後、又有新刻否。此書爲人攫去。乞仍惠一部。(『檀几叢書』へが出版された)後、また新刻があるか否か知りません。この書は人に奪われてしまいました。なおもう一部恵んで頂ければ幸いです)」とある。

以上見られる「奪われた」という言葉の眞意はよくわからないが、奪われるほど人氣があったということなのである。ちなみに『虞初新志』や『昭代叢書』でも同様に「奪われた」ケースが散見される。

e. 陳鼎の場合

次に陳鼎(字は定九、號は子重・留溪。湖南黔中〈浙江江陰とも〉の人)に寄せた書簡を見ておこう。陳鼎は「心齋居士傳」の作者で、『虞初新志』や『昭代叢書』に多數作品が収められている。

…。所論拙選叢書、祇印出二十餘部、發去坊間、趕考之外、所存不多。今寄上檀几叢書初集五部、昭代叢書五部、幽夢影四部暨凱旋詩歌、到日乞檢入。從來索書不過一部。多則二三部足矣。先生竟各一二十部、獨不慮人以奇貪異

酷議其後耶。一笑。附上封面數張、煩付各書坊粘貼肆中。如欲得書、聽其買紙來印。(28)

(お手紙で仰る拙選の叢書は、ただ二十部ほど印刷し、書店に出回りましたが、科擧へで必要な書?以外は、あまり多くはありません。今『檀几叢書』初集五部、『昭代叢書』五部、『幽夢影』四部および『凱旋歌』を寄上致しますので、届きましたらお確かめ下さい。ふつう書を求めるにしてもせいぜい一部で、多くても二、三部で足りります。先生はなんと各十、二十部で、人から奇異で貪欲な奴だと後世に言われぬいか危惧せざるを得ません。一笑。封面數枚、お付け致しますので、お手数ですが各書店に頼んでお店に貼って貰って下さい。もし書〈叢書〉を得たいとお思いでしたら、紙を買ってきて印刷して下さい構いません。…)

この中の「十、二十部」には『檀几叢書』も含まれているようである。更に後に陳鼎が寄せた書簡には、以下のよう
に記している。

∴。而欲求先生之昭代檀几兩叢書者、難更僕數。如王安節・龔文思・王崑繩・朱少文、此數公皆當世海內大名士也。囑之再三、要素此書。而藩臬兩臺幕中之王仙冠・李雲衣輾轉相托索取此書。∴。祈先生檀几初二集各賜數部、昭代叢書亦賜數部。此種書讀之令人快心爽目、故令人垂涎耳。(29)

(∴。しかし先生の『昭代叢書』『檀几叢書』兩叢書をご希望の方は數え切れないほどで、例えば王安節〈鑿〉・龔文思〈翰〉・王崑繩〈源〉・朱少文〈不詳〉といった方々で、彼らはみな當世海内の大名士であります。〈彼らに〉何度も頼まれてこの書を探し求めています。しかも藩臬(藩司〈布政使司〉)と臬司(按察使司)の兩幕客中の王仙冠と李雲衣(ともに不詳)に何度もこの書を探し求めるよう頼まれました。∴。先生の『檀几叢書』初集・二

集それぞれ数部、『昭代叢書』もまた数部賜りますようお願い致します。この種の書は讀めば氣分爽快にさせてくれるものなので、皆の垂涎的なのです。…)

とあり、更にその直後に寄せた書簡には、

…。以弟與先生莫逆求大作者屢滿戶外。而求檀几初二集及昭代叢書者指不勝屈。皆弟素所交好義、不容辭。故前二札皆上懇先生其賜一二十部之多。…。檀几昭代兩種書如先生不寄來、弟亦無以自立于天壤。其虞初志及尊著雜作并友聲等書、大爲諸名士垂涎。…。

(…。私が先生と莫逆の友なため、(先生の)大作を求める者がしばしば戶外に充ち満ちております。しかも『檀几叢書』初・二集および『昭代叢書』を求める者は數え切れないほどです。みな私の平素から交誼のある者で、斷ることはできません。ですので以前お寄せした二札とともに先生より十、二十部以上を賜るようお願い致しました次第です。…。『檀几叢書』『昭代叢書』兩叢書は、もし先生がお寄せ下さらなければ、私はまた面目が立ちません。『虞初(新)志』および尊著雜作、並びに『尺牘友聲』等の書は、大いに諸名士の垂涎的なのであります。…)

とあることから、『檀几叢書』『昭代叢書』を合わせた部數であることがわかる。

② 作品の掲載及び提供の依頼とその謝辭

a. 作品提供の依頼 (張潮↓友人)

次に、『檀几叢書』に掲載するために、張潮が知人に作品の提供を依頼した書簡を見てみよう。例えば、黃雲^①、冒丹書、孔尙任、陸次雲^②などに寄せた書簡に見られる。

冒丹書（一六三九—一六九五。字は青若、江蘇如阜の人。冒襄の子）に寄せた書簡^③では、まず近頃死去した父冒襄（一六一一—一六九三。字は辟疆、號は巢民。『影梅庵憶語』の作者）に對する弔辭を述べた上で、以下のように續けている。

∴。湖上王丹麓欲選刻時人小品雜著、如眉公祕笈之類。名曰檀几叢書。屬弟廣爲徵購。憶尊公先生有芥茶彙鈔・蘭言諸刻、最爲精妙。向年曾蒙惠讀。迄今日久、亦不記爲何人愛而携去。年臺讀禮之餘、仍乞檢出寄下。此外有與此種相類者、賢橋梓昆玉及知交中、不妨代爲蒐羅。∴

（∴。〈西〉湖の王丹麓〈倅〉が時人の小品雜著を編纂刊刻しようとしております。それはまるで『陳眉公祕笈』〈陳繼儒の編。別名『寶顏堂祕笈』〉の類のようなものです。名付けて『檀几叢書』と言います。私も廣く〈掲載する作品を〉買い求めるよう頼まれました。確かお父上〈冒襄〉に『芥茶彙鈔』や『蘭言』という作品がお有りです。とても素晴らしい作品で、以前拜讀させて頂いた覚えがございます。今日に到って、また誰かに愛好されて持っていかれてしまいました。あなたが喪に服する合間に、なおお探してお寄せ頂ければ幸いです。このほかにこの種と似た作品がご子息様やご兄弟、またご友人の中でお有りならば、代わりにお探し頂いても構いません。∴）

張潮は冒丹書の父で、明の遺老として高名な冒襄の作品を『檀几叢書』に掲載するように提案している。この書簡は一六九四年頃のものである。これに對し後に冒丹書は書簡を寄せ、以下のように記している。

∴。先君芥茶彙鈔呈上。内有拙作品茶歌亦涉茶事。果能附入大選否。先君著述付梓者極多、不孝因先君見背、日夕號痛。去死不遠、然一息尙存、未能忘此恨。無點金之術、廣爲印行、奈何、奈何。⁽⁸⁾

(∴)。先君の『芥茶彙鈔』を呈上します。その中に拙作の『茶歌』(不詳)があり、これもまた茶事に涉ります。果たして大選にお入れ頂けますでしょうか。先君の著述で出版する者は極めて多いのですが、不孝にして先君がこの世を去ってから、日夕號泣痛哭しております。まだ死去から遠くありませんが、命ある限り、未だこの恨みを忘れてはおりません。金の成る木はございませんが、廣く印行したいと思っております。如何でしょうか)

このように冒丹書は張潮の希望通り『芥茶彙鈔』を贈っている。しかしながら、どのようないきさつかは不明であるが、この作品と『蘭言』とは實際は『檀几叢書』には收められず、『昭代叢書』甲集に收藏されることとなる。⁽⁹⁾ もしかすると出版に間に合わなかったのかもしれない。張潮は書簡で「∴芥茶大刻暨爐注蘭言俱借光入叢書二集中、此書明歲爲期。今所輯已將五十種矣。∴(∴『芥茶(彙鈔)』大刻および『宣爐(歌)注』『蘭言』は全てご威光を叢書二集中にお借り致しますが、この書は來年が期限です。今集めているのはもう五十種になろうとしております⁽¹⁰⁾」と述べている。また、更に冒丹書は冒襄の遺作を出版しようと計畫しており、張潮にその援助も要請していたふしが窺える。

また、孔尙任(一六四八一—一七一八。字は季重、號は東塘、岸堂主人。山東曲阜の人)に寄せた書簡では、「∴近刻叢書特呈台政。尊著有類此者不妨郵示、以爲二集三集之地。二集所輯已將五十種、擬以明年授梓也(∴近刻の叢書は特にあなたの指正に呈します。尊著でこれに類する作品がございましたら、お寄せ頂いて構いません。そうして二集、三集を作りたいと思っております。二集で集まった作品は、もう五十種になろうとしています。翌年(一六九六?)授梓

する豫定です⁽³⁸⁾」云々と述べている。但し、孔尙任の作品は『檀几叢書』に收められず、『昭代叢書』乙集に收められることとなった⁽³⁹⁾。

なお、掲載の謝意を示す書簡も散見する。例えば王士禛（二六三四—一七一）。字は貽上、號は阮亭・漁洋山人。浙江新城の人）に寄せた書簡に「…叢書二集、今已告竣。大著水月令・長白山錄、又大集中論選詩一卷、敢並借光。（…『檀几』叢書』二集、今完成致しました。大著の「水月令」「長白山錄」また大集中の「論選詩」一卷はあえてご威光をお借りしへ採録ししました⁽⁴⁰⁾」と記している。

b. 作品掲載の依頼（友人↓張潮）

次は逆に他者が張潮に作品の掲載を依頼した事例を見てみよう。

例えば、畢熙陽（字は右萬、號は嶠谷・三復。安徽歙縣の人）は「弟年來因訓蒙童、得輯經史諸書中疑難數百字、編成一帙。名曰蒙席一隅。…謹呈鑑教、不敢望收入叢書也。（私はここ數年來、蒙童に訓え、經史諸書中の難しい文字數百を集めて、一帙に纏めました。名付けて「蒙席一隅」といいます。…謹んで進呈してご覧頂きたく存じますが、あえて叢書に入れて貰おうとは思いません⁽⁴¹⁾）」と述べている。ここでいう「蒙席一隅」については不明であるが、「不敢望收入叢書也」という語は遠回しな掲載依頼だったのであろう。その直後に（或いは同時に）寄せた書簡では、

拙作佛解、己未庚申間、曾請教尊翁先生蒙評語。已經付梓、仍有數篇未及續刻。今彙成一帙、共計六篇。謹呈鑑教。

雖不敢望收入叢書、然叢書中似亦不可少此也。蓋從來闢佛者雖多、而得其解者甚少。苟不得其解、雖盡力闢之、徒增釋子之笑耳。特在高明、當不見弃⁽⁴²⁾。…

〔拙作『佛解』は己未・庚申〔康熙十八・十九〔一六七九・八十〕年〕の間に嘗て尊翁先生〔張潮の父、習孔〕に教えを請い、評語をいただきました。〔今〕すでに出版しましたが、なお數篇はまだ續刊しておりません。今一帙にまとめ、共に六篇となりました。叢書に収めていただくことは望みませんが、叢書中これを缺くこともできないでしょう。思うに従來鬪佛〔對佛批判〕する者は多いのですが、その解を得る者は極めて少ないのです。假にその解を得ないまま、たとえ必死になって批判したとしても、いたずらに釋子〔僧侶〕の失笑を増すばかりです。高明な方〔あなた〕にお願ひすれば、きつとお見捨てにならないでしょう。〕

とあり、今度はここでも「不敢望收入叢書」と述べつつも『佛解』の内容に言及して掲載を依頼している。これに對し、張潮は以下のように返信している。

細讀大著佛解、知足下于佛教不啻深惡而痛絕之。但輒近爲世道害者乃楊朱之教、非佛教也。：僕于彼教不鬪亦不護。然常謂二氏必不可廢。拙著幽夢影中曾及之。又異端說一首並呈教。：〔註〕

〔細かく大著の『佛解』を讀ませていただき、あなたが佛教に對してただ深く憎んでいるだけではなく、痛くこれを拒絶していることがわかりました。ただ最近世道の害となっているのは、楊朱〔ここでは道家を指す?〕の教えであつて、佛教ではありません。〔小塚注―以下原文約四葉700餘字有り、儒佛道について持論を述べる〕：僕はかの教〔佛教?〕に對して排斥もしないし、擁護もしません。しかしながら二氏はぜひとも廢すべきではありません。拙著の『幽夢影』でかつてこのことに言及しました。〔註〕また「異端說」一首を呈上いたしますのでご覽下さい。〕

この後、結果的に「佛解」は『檀几叢書』二集に收められることとなった。以上のように、『檀几叢書』収録の作品は、一方では張潮の方から作品を求めることもあったが、場合によっては著者が賣り込むこともあったようである。

3. 書簡に見られる『檀几叢書』の編集状況について(二)——共編者王暉の場合——

本節では『檀几叢書』の共編者でもある王暉との間で交わされた書簡について見ていきたい。

①張潮と王暉の交遊

王暉(一六三六—?)。字は丹麓、號は木菴、松溪子。浙江仁和县「杭州」の人)は『今世説』(八卷)の作者として知られる。明の諸生であったが、清の世になってからは官につかず隱居し、作品制作に力を注いだ。また、著に『逐生集』十二卷、『霞舉堂全集』三十五卷等がある。杭州を中心に幅廣い交遊關係を有しており、『檀几叢書』にも友人の作が収録されている。友人吳儀一(字は舒鳧。浙江錢塘の人。張潮の友人でもある)に「王丹麓本傳」⁽⁴⁶⁾がある。

王暉との間で交わされた書簡は、全體として『偶存』(張潮↓王暉) 35通、『友聲』(王暉↓張潮) 31通と相當な数の書簡が遺されている。その多數は叢書の編纂に關わるもので、しかもその中『檀几叢書』に關連する書簡は、偶存16通、友聲17通とともにほぼ半數を占めている。⁽⁴⁷⁾また、前掲の『檀几叢書』に關する記述を有する書簡の全體數と較べても、王暉に關する書簡は『偶存』が約3分の1、『友聲』が約4分の1を占めており、張潮の叢書編纂狀況解明の重要なキーパーソンの一人と言える。詳しくは稿を改めて論じたい。

ところで張潮と王暉はいつ知り合ったのであろうか。例えば、一六八九年以前に寄せたと思われる張潮の書簡があり、

王暉に自作を贈ったり、王暉の『今世説』について言及したりする様子⁽⁴⁸⁾がうかがえる。一方王暉は張潮の五十歳の誕生祝いとして寄せた「張山來五十序」⁽⁴⁹⁾で、

康熙己卯六月、張子山來、五十初度。…予自甲戌與張子定文字交、迄今數年、郵筒往來、每月不絕。…又嘗纂輯近人述作、如昭代・檀几叢書餘集・虞初新志諸書、一言可采。表之不遺餘力。人賴以長留天地間者、不知凡幾。…
(康熙己卯〔康熙三十八〕一六九九)年)の六月、張山來の五十歳の誕生日。…私は庚戌〔康熙三十三〕一六九四(年)より張子と文字の交を定め、今に至ること數年、郵筒の往來は、月毎に絶えず行っております。…又嘗て近人の述作を纂輯し、『昭代〔叢書〕』『檀几叢書』餘集、『虞初新志』の諸書は、一言にして取るべきものです。これを制作するのに全力を傾け、(そのお陰で)天地の間に長く留まることの出來たものは、數えきれません。…)

云々と述べている。いずれにせよ、兩者の關係を強く繋いでいるのは、『檀几叢書』の編纂であった。以下その編纂に関わる兩者の書簡を見てみよう。

②『檀几叢書』の編集状況と體裁について

前述の通り、『檀几叢書』初集が一六九五年に刊行されて以降、一六九七年頃に二集、一六九八年頃に餘集と立て續けに編纂・刊行された。以下に見る書簡のやりとりを見ると、どうやら張潮の元に作品を集め、版木を組んで見本を作り、それを王暉に送って確認していたようである。

初集の編集に関する書簡は比較的少ないが、これは初集の大部分は既に王暉が編集済みであり、張潮が手を加える餘

地があまりなかったからかもしれない。その代わり、二集・餘集については関連する書簡が多く、張潮の手が多く加わっている様子が窺える。以下詳しくみてみよう。まず王暉は、張潮に以下のような書簡を寄せている。

…。副本并原稿共計三十七種寄上。倘得先生即爲選刻、感戴不獨在僕一人也。其式或倣快書五十種刻法何如。…。
(…。副本並びに原稿共に計三十七種お寄せ致します。もし先生がすぐに選定刊刻していただければ、感謝するのは私だけではないでしょう。その板式は『快書五十種』の刻本に倣っては如何でしょうか。…)

これは恐らく時期的に見て初集の原稿だと思われるが、果たして一六九四年の夏、杭州で會見した前か後かは分からない。いずれにせよ、既に三十七種の作品が集まっていたことがわかる。實際『檀几叢書』の版心の下部には王暉の版元である「霞舉堂」の名が刻まれているが、この書簡の記述から、張潮が自分のところで版刻して印刷したことが推定される(二集・餘集には「霞舉堂」の文字が刻まれていない)。

また、『檀几叢書』の様式が明・閔景賢(字は士行、練江(廣東潮州)の人)の編纂した叢書『快書五十種』をお手本にしようとしていたこともわかる。例えば一六九四年に王暉が張潮に寄せた書簡に以下のように記している。

…盥手捧讀、知叢書之刻、先生即欲舉行。是文壇中大幸事。弟初爲此舉、原倣快書五十種而輯。今先生所定書樣板式皆最雅最妥。恰與鄙意相符。…⁽⁶⁾

(…手を洗ってお手紙を捧讀し、叢書の出版について、先生がすぐに舉行なさろうとしていたことを知りました。これは文壇中の大いなる幸事であります。私をはじめこの舉を手がけた時、もともと『快書五十種』に倣って集め

ました。今先生がお決めになった書式や版式はみなとりわけ雅で妥當です。まるで私の考えとぴったり符合しております。(…)

一方、張潮はそれと前後して以下のような書簡を寄せている。

…。叢書一刻亟欲舉行。但必將式樣與足下商酌盡善、方無遺憾。案漢魏叢書・說郭・百川學海・眉公祕笈之類、俱未合鄙意。惟快書五十種之式、稍有可從。欲寫式樣一二種以候足下去取。因來人行速、不及郵政。其板片大小以霞舉堂大集爲準。只畧收進半行、俾釘線處稍覺寬展。其內均作九行、高低仍舊亦作二十字。庶幾荊川太史皆可通行。未審高明以爲然否。每種前署名處、一爲某輯、一爲某校、得自高齋者台銜前列。僕附其次、僕手所輯者、不揣僭妄、糠糶在前。雖有異同、不妨於凡例中識之、以見吾兩人兩地共事之意。何如、何如。…。

(…。叢書の翻刻は速やかに舉行しようと思います。但し必ず様式はあなたのご注文通りに行いますので、ご心配なきよう。『漢魏叢書』『說郭』『百川學海』『眉公祕笈』の類を案ずるに、ともに私の意圖とは合致しません。ただ『快書五十種』の方式はややよるべきところがあります。様式一、二種を寫して貴方の取捨選擇をお待ちしようと思います。來人〈書信を傳達する者〉が出發を急いでおり、詳しく書いてある暇がありません。その版木の大きさは霞舉堂の大集に準據致します。ただ〈以下「只畧收進半行」の意味不明―匡郭を半行分縮めているという意味か〉、釘線〈界線?〉の部分はやや氣持ち廣めにしております。その中は均しく九行に作り、〈一行の〉高低はやはり元のようにまた二十字に作りました。きつと荊川太史でも通行すべきものでしょう。高明なあなたがこれを良しとするか否かはわかりません。作品ごとの前にある署名は、一は「某輯」、一は「某校」とし、あなたから出た作品は、

あなたの名前を前列に致しました。僕はその次に記しましたが、僕の手で集めた作品については、不遜僭越ながら、私への名前を前に出しました。異同がございますが、何なら凡例中にこれを記してもかまいません。我ら兩人が兩地（揚州と杭州）で共同作業をしている意を表すこととなるでしょう。如何でしょうか。……

実際に『快書五十種』を見ると、半葉が八行十八字で構成されており、これは『檀几叢書』（九行二十字）とは合致しない。あくまで一集五十種という点を参考にしただけということであろうか。なお、文中の「霞舉堂大集」とは、王暉の詩文集である『霞舉堂全集』のことか。本の大きさは若干『檀几叢書』の方が大きい⁽⁵⁴⁾が、但しこちらは半葉九行二十五字（本文）で、しかも匡郭だけで界線が無い。匡郭の大きさは『檀几叢書』の方が若干横長である⁽⁵⁵⁾。書簡中の「只畧收進半行……」云々は、読みやすいように横長にし、1行の字数を減らしたということであろうか。当時の原本と現行本が同じものなのか否かを含めて、版本についてこれ以上本論では言及しない。

また、『檀几叢書』初集を見ると、一部を除いて卷ごとに「武林王暉丹麓輯」、改行して並列に「天都張潮山來校」と示されており、張潮と王暉の順序が前後している箇所は見つけられない⁽⁵⁶⁾。しかし、以下の卷は張潮の代わりに別の者が校訂者として名を連ねており、その名残であろうか。

卷十四・張正茂「龜臺琬琰」——「天都黃奭玄龍校」、卷十八・張習孔「家訓」——「新安施璜虹玉校」、卷二十二・張習孔「七勸口號」——「新安殷署日戒校」、卷二十四「聯莊」——「梁溪顧彩天石校」、卷三十二・張潮「七療」——「海陵黃雲仙裳校」、卷三十八・張潮「酒律」——「婺州朱慎其恭校」

なお、これらはすべて張潮本人あるいは張潮の親族の作品である（但し、卷三十四・張澧〈張潮の家兄〉「地理驪珠」は張潮の校になっている）。これに關する記述が張潮の別の書簡に見られる。

∴。台諭所云叢書一事、在先生謙光厚德、眞可謂有而不居。然弟細思之、先生一番纂輯苦心、實實不可埋沒。又如先祖龜臺琬琰〔載女仙七十二人〕、先君之七勸、家兄之地理驪珠、弟之酒律之類、咸欲藉此以傳於世。若首列賤名實多未便。若於此數種、另用一人名姓於書例、又未免參差。再四躊躇。不若分爲前後兩集。其前集竟以先生爲主、或三十種或四十種俱可。其續集則用弟名。如大作烏官記・看花述異記之類、皆載入續集之中。∴。

（∴。お手紙で仰られた叢書の一件ですが、先生は謙虚で人徳厚く、まことに「存在をひけらかさない」『周易』謙卦〕お方と言うべきです。しかしながら私がつぶさに思いますに、先生の編纂のご苦心は、まことに埋没させてはいけません。さらに〈我が〉先祖〈張正茂〉の「龜臺琬琰」〔原注：女仙七十二人を載す〕、先君〈張習孔〉の「七勸」、家兄〈張澧〉の「地理驪珠」、私の「酒律」の類は、みなこれ『檀几叢書』を借りて世に傳えようとしたものであり、はじめに賤名を並べることはなほ多いのは、宜しくないでしょう。もしこの種の作品で、他に一人の姓名を書例に用いるの（張潮の名を入れること）は、またいまだ不揃いになるのを免れません。何度も躊躇いたしました。前後兩集に分けるのがよいと思います。その前集は最終的に先生を主としますが、或いは三十種、或いは四十種でもかまいません。その續集は私の名前を用います。大作「烏官記」「看花述異記」の類は、すべて續集の中に掲載します）

張潮はもう少し王暉を前面に押し出そうと考えていたようである。なお、「烏官記」に關しては詳細不明であるが、

「看花述異記」は『虞初新志』卷十二に收められている。張潮は自身（および親族）の作品は前集（初集）に入れて王暉を主編とし、逆に王暉の作品は後集（二集）に入れて張潮自身が主編となる案を出していたことがわかる。實際は初集は王暉輯・張潮校、二集・餘集は同輯とし、張潮等の作品は一部は初集に入れ、王暉とその他張潮の作品は餘集へと組み込まれた。これについてはまた後述するが、いずれにせよ、『檀几叢書』の構成が直前まで色々と検討されていたことがわかる。

③ 編集作業について

張潮は一六九五年、王暉に次のような書簡を寄せている。

客冬小价回揚得接翰教、兼悉近祉、深慰鄙私。叢書五十種已刻、統就其半。今以全篇者特寄、奉覽幸照入。向讀大集、知先生今歲攬揆初度、弟擬先印二十部郵寄高齋、以代交梨火棗之祝。想先生見之亦必掀髯稱快也。但各種前小序、雖曰可以無煩、而序文凡例、均不可少。乞於暇日早爲製、就郵來以便。授梓則五月間便可成書矣。向日承寄原書。寫本中頗多譌字、無從考對、亦細加校閱。其卷帙次序俟五十種俱已刻完、然後編定。大約亦以經史子集爲次也。

（昨年（一六九四年のことか）の冬、揚州に戻ってきた召使いから「あなたの」書簡を拜受し、ご挨拶を得、深く私の心の慰めとなりました。叢書五十種は既に版木に刻み、その半分が完成しました。今全編を特にお寄せ致しますのでご覧下頂ければ幸いです。以前大集を読み、先生の今年の誕生日を知りましたので、まず二十部を印刷してあなたの書齋にお贈りし、お祝いに代えさせて頂きたく存じます。きっと先生がこれをご覧になれば、ひげを擦っ

て「面白い」と仰ることでしょう。しかし各種（作品）の前の小序は、お手を煩わすべきではないのですが、序文凡例は均しく少くない方がよいと思います。餘暇に早急にお作りになって、ご郵送下さい。授梓すれば五月中には完成します。以前原稿をお寄せ下さいましたが、寫本中には譌字がたいへん多いので、考察對稱し、またつぶさに校閲を加えるべきがございません。その巻帙の順序は、五十種がすべて刊刻するのを待って、その後編纂決定したいと思います。およそ經・史・子・集の順番になるかと思えます。…)

この書簡では張潮が王暉に叢書の各作品に小序を制作するよう提案している。

また、實際の『檀几叢書』には、編者の評がほぼ付されていない。これは手本とした『快書五十種』とも異なるし、『虞初新志』や『昭代叢書』とも異なる。しかし、この書簡を見る限り、本來は評語を加える計畫があつたことがわかる。以下關連する書簡をいくつか見とおこう。例えば、初集が完成する前年（一六九四）の十一月に張潮から書簡を受けとつた王暉は、以下のように寄せている。

。但欲每種各加評論、在弟實有數難。夫既欲評論各種、必將各種始終循覽、或俟有興乘暇可以漸作。今已奉寄台處、案頭別無副本、且不知前集數十種爲誰。何不使命筆、一難。若待先生梓成寄樣、而後命筆則所難得者成書耳。幸而書成、渴望傳布矣。乃爲此評論復耽延時月、曠日持久所不取也。如欲速則弟又無此捷才、可以走筆應命、二難。況弟近今苦境、更有不可對先生言者。可以舊染風症痼疾怔忡、兩者不時竊發。一發則心志動搖、肩臂痛不可忍貧。而且病不能用心文墨、三難。雖快書之前俱有小序、然說郭・稗海及漢魏叢書諸本皆各自爲一種、並無評論小序。故得已則弟欲已之、如不得已先生必欲有作、則是集既分兩人前後纂輯。弟前集自無先生、後集自有亦不礙也。⑥

(…)。ただ毎種にそれぞれ評論を加えることは、私にとっては本當に幾つかの難點があります。そもそも各種〈作品〉を評論しようとしても、必ず各種を始めから終わりまで閱讀し、或いは興が有り暇に乗じてや々と作ることができるのです。今既に〈原本を〉あなたの所にお寄せしてしまい、机の上には副本も無く、しかも前集の數十種〈張潮が集めた作品集のことか〉は誰が作ったかわからないのに、〈評語を〉作ることができましようか。これが一つ目の難點です。もし先生が印刷して見本を寄せるのを待って、その後制作すれば得がたいものとなるでしょう。〈しかし〉幸いに書が完成すれば、〈その〉傳播を渴望します。この評論のためにまた日月を引き延ばし、むなしく長引かせることは出来ません。もし速やかに行えというのであれば、私にはまたそのような才能は無く、走り書きをして命に應ずるまでです。これが難點の二つ目です。まして私は最近苦境にあり、更に先生の言に應えることが叶いません。昔からの持病や動悸が時として思いがけず起ります。一度發病すると心が落ち着かず、肩や腕が痛み出して堪えられなくなります。その上病めば執筆に身を入れることができなくなります。これが三つ目の難點です。『快書〈五十種〉』の前にはともに小序がありますが、『説郛』や『稗海』『漢魏叢書』諸本は皆それぞれ一種とし、評論小序が有りません。だからやめられるのならやめたいと思ひますし、やむを得ず先生が是非ともお作りになりたいのならば、この集は既に二人前後に分けて纂輯し、私の前集はもともと先生がいない〈ので作らず〉、後集に有る〈作る〉のはもちろん妨げません。(…)

結果的には『檀几叢書』中、初集・二集ともに評語が附されなかつた(評點は見られる)。なお、附評の話は餘集制作の段階でも引き續き意見が交わされており、張潮は王暉に「今餘集刻就若干葉寄上。乞每篇加一評語寄來(今餘集の版刻若干葉をお寄せ致します。篇ごとに一つ評語をお加えいただき、お寄せ下さい。①)」と催促している。ちなみに餘集

の各作品の文末には張潮・王暉（及び若干名）の手による評語が加えられており、中でも張潮の評語が壓倒的に多い。内譯を見ると、餘集57作品のうち、張潮43作品・王暉9作品（うち兩者共に附しているのは3作品）・その他7名各1作品・評語無し2作品となっている。

④ 編者自身の作品の掲載について

『檀几叢書』餘集は全て2〜3葉程度の分量の短編作品が収められており、その後半部分には編集者である張潮・王暉の作品が収録されている。⁽⁶³⁾ 二集の選例にも見られるように、自分たちの作品を掲載するか否かについては、かなり躊躇したようである。しかし張潮は王暉に以下のように提案をしている。

∴。檀几餘集、檢大集中如紀草堂十六宜及課婢約皆妙、極所當載入。初意以與先生共事、不便自選己文後。見陸雲老所刻古今文繪、竟以己文列後、惟于題下用附政二字。此法似屬可行。⁽⁶⁴⁾

（∴。『檀几叢書』餘集ですが、大集中〔霞學堂文集〕を調べると、「紀草堂十六宜」〔霞學堂文集〕卷九〕及び「課婢約」〔同卷十〕はどちらも素晴らしく、是非とも採録すべき作品だと思います。初めは先生と（編者として）事を共にしているので、自分（たち）の著作を叢書の後ろに列べるのは都合が悪く思っております。（ですが）陸雲老（陸次雲、字は雲士。浙江錢塘の人）の編纂した『古今文繪』⁽⁶⁵⁾はなんと自分の作品を後に並べており、ただ題名の下に「附政」の二字を記しています。この方法は見習うべきだと思います。∴）

陸次雲は張潮・王暉共通の友人で、三種の叢書にもその作品が多数掲載されている。また張潮は彼と頻繁に書簡のや

りとりを行っているが、その中で右のような名案を得たようである。實際に『檀几叢書』餘集の張潮・王暉作品には、題目の下に小文字で「附政」の二字が附されている。ここでいう「附政」は「編者の作品を附す」という意味であろうか。

おわりに

以上、張潮の書簡を手がかりに『檀几叢書』の編集状況について考察してきたが、最後に一言及すべき点がある。それは『檀几叢書』と『昭代叢書』の関連性についてである。詳しくは稿を改めて論じたいが、ほぼ同時期に連続して編纂出版された『檀几叢書』と『昭代叢書』は、その掲載作品について様々な紆餘曲折があったようである。この兩叢書は機械的に五〇巻の定數に達し次第出版することが基本的な方針であった。

例えば、狄億（字は立人。江蘇溧陽の人）への書簡には、「…、大著菊社約暨御試恭紀二種、已經借光。一載檀几餘集、一載昭代乙集。書成自當郵呈臺覽也。…（大著「菊社約」および「御試恭紀」の二種は、すでにご威光をお借り致しました。一つは『檀几叢書』餘集、もう一つは『昭代叢書』乙集に掲載させて頂きました。叢書が完成しましたら、もちろんお贈り致しますので、ご覧下さい）」とあり、「菊社約」は『檀几叢書』餘集に、「御試恭紀」は『昭代叢書』乙集にそれぞれ収められた。また、吳陳琰（字は寶崖、浙江錢塘の人）に寄せた書簡では「…大著春秋三傳同異考及攬勝圖俱借光、分載于檀几餘集、昭代乙集中（大著の「春秋三傳同異考」および「攬勝圖」はともにご威光をお借りし、『檀几叢書』と『昭代叢書』乙集に分けて掲載させていただきました）云々とある。「攬勝圖」は『檀几叢書』餘集に、「春秋三傳同異考」は『昭代叢書』乙集に収められた。なお、吳陳琰はその後張潮に寄せた書簡で、更な

る自著の掲載を希望している。

但し、これが嚴格に編纂時期の都合だけで分けられたのかというと、必ずしもそうではなかったようである。例えば、王士禎の作品は、前號⁽²⁾でも觸れた通り張潮の叢書に多數收められている。具體的には『虞初新志』に2作品、『檀几叢書』に3作品、『昭代叢書』に6作品と3種の叢書に満遍なく配置されていることがわかる。張潮が『檀几叢書』の選例に記したように、王士禎の作品は意圖的にそのように配された可能性が高い。王士禎は言うまでも無く當時の文壇の領袖であり、その影響力は計り知れず、その作品ともなれば叢書の目玉作品の一つともなり得る。このケースでも分かるように、ある程度その分別や選定に編者や作者の意圖が加わることもあったようである。この詳細についても、今後の課題としたい。

いずれにせよ、『檀几叢書』の編纂に際しては、共編者の張潮と王暉は頻繁に書簡をやりとりをしながら進めてゆき、叢書の體裁から作品の選定、評語の付加など様々な事項について意見が交わされている。また、様々な人物から『檀几叢書』の贈呈依頼を受ける一方、『檀几叢書』に自身の作品を掲載してもらおうよう要請した書簡も少なくない。このように『檀几叢書』の編纂・傳播が様々な文人たちとの間で交わされた書簡によって行われた一側面を窺うことができる。しかしながら、『檀几叢書』の編纂過程についてはまだまだ不明な點が多く、また他の叢書との關係等についても紙數の都合上割愛せざるを得なかった。今後更なる調査を行うとともに、もう一つの叢書『昭代叢書』編纂に関わる書簡についても調査を進め、江南を中心とした文人活動の實態解明に繋げていきたいと考えている。

表 1. 『尺牘友聲集』中の『檀几叢書』に関する書簡(各巻別)

辛	庚	己	戊	丁	丙	乙	甲	卷數
9	8	6	0	0	0	0	0	檀几
59	76	63	85	82	94	94	97	總數
一六九六	一六九五	一六九四	一六九三	一六九二	一六八九以前	一六八九以前	一六八〇以前	年代(西歷)
(王暉)、628(畢熙陽)、633(張竹坡)、642(孔尙任)	597(王暉)、604(王弘撰)、606(畢熙陽)、608(畢熙陽)、613(蘇全許)、621(王暉)、589(曹之璜)、592(吳肅公)	(王暉) 458(王暉)、485(江之蘭)、486(王暉)、499(史申義)、509(江之蘭)、515	なし	なし	なし	なし	なし	No. (差出人)

表2. 『尺牘友聲偶存』中の『檀几叢書』に関する書簡(各巻別)

巻數	檀几	總數	年代(西歷)	No. (宛名)
一	0	55	一六八〇前後	なし
二	0	48	一六八九以前	なし

※No.―拙稿「張潮『尺牘友聲集』『尺牘友聲偶存』研究資料編」表2の書簡通し番號
 ※檀几―『檀几叢書』関連の書簡數 ※總數―卷全體の書簡數 ※年代―推定制作年代

五	四	三	二	一	癸	壬
3	5	2	5	6	11	11
55	39	35	55	60	52	63
一七〇五	一七〇三、四	一七〇一、二	一七〇〇	一六九九	一六九八	一六九七
969 (畢熙暘)、1004 (葛常夏)、1010 (程瑞祜)	928 (孔尙任)、942 (王概)、950 (張符驤)、952 (張鼎望)、958 (吳儀一)	889 (張鼎望)、919 (王暉)	844 (毛綺齡)、855 (朱正色)、856 (胡復亨)、860 (王暉)、882b (王士禎)	784 (王暉)、802 (王暉)、813 (黃泰來)、815 (吳陳琰)、831 (方象瑛)、833 (吳陳琰)	747 (陳鼎)、754 (徐發)、755 (陸次雲)、766 (王暉)、767 (吳陳琰)	657 (余蘭碩)、659 (王暉)、665 (吳肅公)、666 (錢嶽)、673 (王暉)、690 (王士禎)、702 (黃雲)、712 (費錫璜)、714 (王暉)、715 (錢嶽)、716 (余蘭碩)

十一	十	九	八	七	六	五	四	三
0	1	3	3	8	9	13	7	4
28	48	42	44	43	30	39	44	35
一七〇四、五	一七〇二、三	一七〇一	一七〇〇	一六九九	一六九七、八	一六九六、七	一六九五	一六九五以前
なし	407 (王暲)	353 (王暲)、370 (楮人穫)、371 (張鼎望)	315 (王暲)、316 (毛際可)、335 (王士禛)	瑛)、289 (毛際可)、291 (同宗某) 253 (王暲)、254 (狄億)、279 (王暲)、282 (吳陳琰)、283 (王暲)、288 (方象)	士禛)、244 (毛際可)、245 (王暲)、246 (高雲)	士禛)、220 (孔尚任)、221 (王暲)	尚任)、176 (畢熙陽)	114 (冒丹書)、116 (王暲)、130 (王暲)、131 (張兆鉉)
					233 (王暲)、234 (陳鼎)、238 (孔尚任)、239 (王暲)、240 (陸次雲)、242 (王	207 (王暲)、208 (王士禛)、209 (孔尚任)、210 (黃雲)、216 (王暲)、219 (王	184 (孔尚任)、185 (王士禛)、194 (孔尚任)、195 (王士禛)、206 (王士禛)、	148 (王暲)、153 (吳肅公)、159 (王暲)、161 (黃雲)、162 (冒丹書)、167 (孔

※No.―拙稿「張潮『尺牘友聲集』『尺牘友聲偶存』研究資料編」表3の書簡通し番號

表3. 張潮の書簡に見られる『檀几叢書』に關する書簡の宛名(偶存)と差出人(友聲)〈五十音順〉

8	7	6	5	4	3	2	1	No.
吳儀一	胡復亨	葛常夏	王暉	王士禎	王弘撰	王槩	汪穎	氏名
字は舒鳧。浙江錢塘。	字は會來。湖北黃州。	字は文度。江蘇淮安。	字は丹麓、號は木菴。浙江仁和。	字は貽上、號は阮亭・漁洋山人。山東新城。	字は無異、號は山史。陝西華陰。	字は安節、號は芥子園。浙江秀水。	字は遯漁。安徽歙縣。	字・號・出身
2 / 0	0 / 0	3 / 0	35 / 16	18 / 7	0 / 0	3 / 0	0 / 0	偶 (總/檀)
1 / 1	2 / 1	3 / 1	31 / 17	12 / 2	2 / 1	1 / 1	1 / 1	友 (總/檀)
作者(1) 仕的(二集・五卷)			共編者。作者(4) 報謁例言(餘集・下卷)、紀草堂十六宣(餘集・下卷)、課婢約(餘集・下卷)、詔卦(餘集・下卷)	作者(3) 長白山錄(二集・十八卷)、水月令(二集・十九卷)、漁洋詩話(二集・二十五卷)	作者(1) 十七帖述(初集・十三卷)	作者(1) 學畫淺說(二集・二十九卷)		備考

21	20	19	18	17	16	15	14	13	12	11	10	9
蘇全許	錢嶽	聶先	徐發	朱正色	史申義	黃泰來	黃雲	高兆	江之蘭	孔尚任	吳陳琰	吳肅公
字は友燕。江蘇高郵。	字は蘊生、號は十青。江蘇蘇州。	字は晉人、號は樂讀居士。江蘇蘇州。	字は袞侯。江蘇蘇州。	字は仲雲、號は梅谷。江蘇蘇州。	字は蕉飲。浙江江都（揚州）。	字は交三、號は石閭。江蘇泰州。	字は仙裳、號は舊蕉。江蘇泰州。	字は雲客、號は固齋。福建候官。	字は含徵、號は文房。安徽歙縣。	字は聘之、號は東塘。山東曲阜。	字は寶崖。浙江錢塘。	字は雨若、號は晴岳・街南。安徽宣城。
0 / 0	1 / 0	3 / 0	0 / 0	1 / 0	0 / 0	3 / 0	3 / 2	1 / 1	13 / 0	18 / 6	7 / 1	7 / 1
1 / 1	11 / 2	7 / 1	2 / 1	1 / 1	2 / 1	19 / 1	14 / 1	1 / 0	15 / 2	20 / 2	8 / 3	17 / 3
								作者（2）——端溪硯石考〈初集・四十五卷〉、觀石錄〈二集・四十四卷〉	作者（2）——文房約〈二集・二十六卷〉、香雪齋樂事〈餘集・上卷〉		作者（1）——攬勝圖〈餘集・下卷〉	作者（1）——酒約〈餘集・下卷〉

34	33	32	31	30	29	28	27	26	25	24	23	22
畢熙陽	費錫璜	狄億	程瑞祜	陳鼎	陳軾	張榕端	張符驥	張鼎望	張道深	張兆鉉	褚人穫	曹之璜
字は右萬、號は岫谷。安徽歙縣。	字は滋衡。四川成都。	字は立人、號は向濤。江蘇溧陽。	字は姫田。安徽休寧。	中「浙江江陰とも」。字は定九、號は子重・留溪。湖南黔	字は葯聞、號は道開。江蘇雲間。	字は樸園。河北磁州。	字は良御。江蘇泰州。	陽。字は荊觀、號は冷公・渭濱。陝西涇	字は自得、號は竹坡。江蘇彭城。	字は貫玉、號は迂菴。	字は稼軒。號は石農。江蘇長洲。	字は中玉。湖南醴陵。
5 / 1	1 / 0	6 / 1	0 / 0	1 / 1	1 / 0	2 / 1	5 / 0	9 / 1	0 / 0	6 / 1	2 / 1	0 / 0
13 / 4	2 / 1	2 / 0	1 / 1	7 / 3	3 / 1	1 / 0	3 / 1	6 / 2	3 / 1	15 / 0	2 / 0	1 / 1
作者(1) — 佛解二集・二十四卷		作者(1) — 菊社約〈餘集・上卷〉						親族。		張潮の甥。		作者(1) — 西湖六橋桃評〈餘集・下卷〉

41	某		1 / 1	0 / 0	同宗
40	陸次雲	字は雲士。浙江錢塘。	5 / 1	5 / 1	作者(1)——山林經濟策〈餘集・上卷〉
39	余蘭碩	田。 字は香祖、號は少霞・湘客。福建莆田。	0 / 0	8 / 2	
38	毛際可	字は會侯、號は鶴舫。浙江逐安。	3 / 3	5 / 0	作者(1)——燈謎〈餘集・上卷〉
37	毛奇齡	字は大可、號は西河。浙江蕭山。	2 / 0	1 / 1	作者(1)——三江考△二集・二十卷
36	冒丹書	字は青若。江蘇如臯。	3 / 1	12 / 2	
35	方象瑛	字は渭仁。浙江逐安。	2 / 1	1 / 1	作者(2)——俗砑△二集・十卷、 艮堂十戒〈餘集・上卷〉

※總／檀——各人物の書簡集に収録されている書簡の總數／『檀几叢書』に關する書簡數。 ※作者——『檀几叢書』に作品が収録されている者。() は収録作品數。作品名下の〈 〉は所在卷數。

※參考——出身地別一覽 安徽5 (歙縣3・宣城1・休寧1) 揚州1 浙江8 (秋水1・仁和1・錢塘3・高郵1・逐安2・蕭山1) 江蘇12 (淮安1・泰州3・長洲1・蘇州4・彭城1・雲間1・如臯1・溧陽1) 陝西2 (涇陽1・華陰1) 湖北黃州1 湖南2 (醴陵1・黔中1) 浙江江陰とも) 山東2 (新城1・曲阜1) 河北磁州1 四川成都1 福建2 (候官1・莆田1) 不明(親族) 2

注

- (1) 「張潮の書簡に見られる『虞初新志』の編集状況について」『漢學會誌』54號・二〇一五年三月)
- (2) 例えば、合山究譯注『幽夢影』(中國古典新書・明德出版社・一九七七年)、高橋璐「張潮與『幽夢影』」(萬卷樓圖書股份有限公司・二〇〇四年)、劉和文「張潮研究」(安徽大學出版社・二〇一一年)、拙論「張潮の交遊關係について―『尺牘友聲集』と『尺牘友聲偶存』を手がかりに―」(大東文化大學『漢學會誌』52號・二〇一三年三月)など。
- (3) 「張潮編纂の叢書について」『漢學會誌』53號・二〇一四年三月)
- (4) 本論では、一九九二年刊行の上海古籍出版社影印本(上海圖書館藏・康熙三十四〔一六九五〕年・霞舉堂刊本)を使用した。また、適宜内閣文庫本(同霞舉堂刊本)も参照した。
- (5) 八卷・十二卷より二十卷に至る經緯については、前掲「張潮の書簡に見られる『虞初新志』の編集状況について」105頁〜109頁を参照。
- (6) 「選例」の具體的な説明については、前掲「張潮編纂の叢書について」158頁〜166頁を参照。
- (7) とともに北京圖書館(北海公園古籍館)、天津圖書館、アメリカ國會圖書館等に所藏。乾隆庚子〔四十五年・一七八〇〕秋鏤・心齋定本・本衙藏版。本論では「臺灣國家圖書館古籍影像檢索系統」(<http://rarebook.ncl.edu.tw/book.cgi?nypage.cgi?HYPAGE=home/rbook/home.htm>)の畫像データ(アメリカ國會圖書館本)を利用する。
- (8) 「張潮の交遊關係について―『尺牘友聲集』及び『尺牘友聲偶存』を手がかりに―」『漢學會誌』52號・二〇一三年三月)、「張潮『尺牘友聲集』『尺牘友聲偶存』研究資料編」(大東文化大學『中國學論集』30號・二〇一二年十二月)
- (9) 前掲「張潮『尺牘友聲集』『尺牘友聲偶存』研究資料編」なお、『友聲』は表2、『偶存』は表3の通し番號。
- (10) 『偶存』131(卷三)「與迂菴」「今選有檀几叢書、願舉以相贈」
- (11) 『偶存』238(卷六)「與孔東塘戶部」「千希從禱乙集刻樣數張附上、又檀几叢書二集一部、讀書論世一部、統呈政臨風馳企不勝溯洄」
- (12) 『偶存』242(卷六)「寄賀王阮亭先生」「大著種種、陸續授梓。先以樣本數葉并檀几叢書二集一部、讀書論世一部郵呈臺覽」
- (13) 『偶存』210(卷五)「復黃仙裳」
- (14) 『偶存』244(卷六)「復毛會侯先生」
- (15) 『友聲』499(己集)「檀几叢書檢出奉趙、只此一冊否。依稀記是兩冊傾箱倒筭、無從尋覓天下之寶」

- (16) 『友聲』 589 (庚集) 「願得先生檀几諸大刻、一讀卽領教言道範之親。願以異日」
- (17) 『友聲』 613 (辛集) 「前蒙惠尊刻、數日以來、坐臥把玩如在水壺中。已不知戶外炎蒸、何旅人之庇福若斯耶。走此鳴謝。並望檀几叢書。一覽非許無厭之求、實令人求之無厭耳」
- (18) 『友聲』 702 (壬集) 「不知檀几叢書之後、又有新刻否。此書爲人攫去乞仍惠一部」
- (19) 『友聲』 485 (己集)
- (20) 『友聲』 712 (壬集)
- (21) 『偶存』 291 (卷七) 「復秋水同宗某」
- (22) 『友聲』 657 (壬集)
- (23) 『友聲』 666 (壬集) 「數日不晤、念甚、念甚。適家信至、附到尤老師與嶽手札外、年譜一冊乃寄先生者、又一謝教帖并原札附到、有一友索檀几叢書不敢以紙價」
- (24) 『友聲』 715 (壬集)
- (25) 『友聲』 702 (壬集)
- (26) 例えば、『虞初新志』中の例については前掲「張潮の書簡に見られる『虞初新志』の編集状況について」98～100頁を参照。
- (27) 陳鼎『留溪外傳』卷六(『明代傳記叢刊』第二十八冊)
- (28) 『偶存』 234 (卷六) 「寄復陳定九」
- (29) 『友聲』 740 (癸集)
- (30) 『友聲』 741 (癸集)
- (31) 『偶存』 161 (卷四) 「與黃仙裳」：「。若將其中大筆所自著者、另爲摘錄。名曰舊樵隨筆、則叢書二集可借光入選也。：」
- (32) 『偶存』 240 (卷六) 「與陸雲士」：「拙選叢書乙集、餘集、虞初新志俱借光大著以增榮寵。緣裝釘未完、未能錄目奉閱耳。：」
- (33) 『偶存』 114 (卷三) 「寄冒青若」
- (34) 「春間返里、近始來揚。忽聞尊公先生騎鯨之耗、老成凋謝、無復典型。其爲悲悼。當不獨在弟一人已也。所恨天各一方、不獲一伸隻鷄絮酒之誼、爲悵悵耳。薄具香楮微儀、特附程舍親郵上、希供之几、筵爲禱」
- (35) 『友聲』 568 (庚集)
- (36) この外『昭代叢書』甲集には「宣爐歌注」が收められている。

- (37) 『偶存』 162 (卷四) 「復冒青若」
- (38) 『偶存』 167 (卷四) 「再與孔子東塘國博」
- (39) 「人瑞錄」 および 「出山異數紀」
- (40) 『偶存』 219 (卷五) 「寄王阮亭先生」
- (41) 『友聲』 606 (辛集)
- (42) 『友聲』 608 (辛集)
- (43) 『偶存』 176 「復畢嶠谷」(卷四) (其三、題名は「又」)
- (44) 『幽夢影』に關連の警句が見られるが、ここでは省略する。
- (45) 『心齋聊復集初集』(内閣文庫所藏) 所收。
- (46) 『霞舉堂文集定本』
- (47) もう少し細かく見てみると(關連書簡數/全體數)、『友聲』—己集(3/3)、庚集(2/3)、辛集(1/3)、壬集(3/6)、癸集(3/3)、新一(2/4)、新二(1/1)、新三(1/3)、新四(0/2)、新五(0/3)・『偶存』—卷二(0/1)、卷三(2/4)、卷四(2/3)、卷五(3/4)、卷六(3/3)、卷七(3/4)、卷八(1/3)、卷九(1/4)、卷十(1/5)、卷十一(0/4)となる。
- (48) 『偶存』 94 (卷二) 「與王丹麓」「丹麓足下、僕自購得文津以來、即知西湖有王子丹麓者。時以不獲握手爲恨。又聞有柳靖公其人者、其相思亦復與思足下相等。後知靖公設帳。雲亭益復自喜。以爲他日西湖邊留連倡和、不復慮無東道主人。不謂因循潦倒所願。至今未遂也。又聞足下有今世說之選、雖未經捧讀、然出自琅瑯手筆其剪裁自必可傳耳。敝宗觀宸榮旋、肅此鳴候。附有拙著數種呈教、倘明歲道經珂里、自當一叩高齋、傾倒積慄也。…」
- (49) 『霞舉堂文集定本』 卷三
- (50) 『友聲』 458 (己集)
- (51) 『友聲』 486 (己集)
- (52) 『偶存』 116 (卷三) 「寄王丹麓」
- (53) 『快書五十種』 天啓六(一六二六) 年序刊本。内閣文庫藏。
- (54) 『檀几叢書』は縦24・5 cm×横15・5 cm、『霞舉堂全集』は22・8 cm×13・5 cm。ともに内閣文庫所藏本で計測。次注も同じ。

- (55) 『檀几叢書』は縦18・0 cm×横13・5 cm、『霞舉堂全集』は20・5 cm×11・5 cmで、『檀几叢書』の方が縦が2・5 cm短く、横が2・0 cm長い。
- (56) なお、『檀几叢書』二集は巻ごとに「武林王暉丹麓」「天都張潮山來」の「同輯」とし、餘集も上巻と下巻の冒頭に同様に記されている。
- (57) 『偶存』130(卷三)「寄王丹麓」
- (58) 『霞舉堂文集』卷十五に見られる。但し、内閣文庫本は目次のみで本文は缺落している。
- (59) 『偶存』148(卷四)「寄王丹麓」
- (60) 『友聲』515(己集)
- (61) 『偶存』239(卷六)「寄王丹麓」
- (62) 具體的には錢永基(燭臣)・徐士俊(野君)・林雲銘(西仲)・顧貞觀(梁汾)・聶先(晉人)・許飛雲(女史)の七名。
- (63) 張潮「書本草」「貧卦」「花鳥春秋」「補花底拾遺」「玩月約」「飲中八仙令」(6作品)、王暉「紀草堂十六宜」「課婢約」「報謁例言」「詔卦」(4作品)
- (64) 『檀几叢書』二集の凡例に「遴選義例、前集已詳。但前係暉所定爲多。故潮之先集暨潮雜著無妨附見而暉文一首不載。今此一集乃暉・潮兩人共輯則兩家著作不敢闕入隻字。匪惟臧拙、理亦宜然」とある。
- (65) 『偶存』253(卷七)「與王丹麓」
- (66) 『古今文繪』は「穀集」「玉集」「稗集」が存在していたようであるが、詳細は不明である。但し「稗集」は上海圖書館藏。同館のweb目録によると、康熙二十八年(一六八九)年懷古堂刊本。全四卷。未見。
- (67) 『偶存』254(卷七)「寄狄立人太史」
- (68) 『偶存』282(卷七)「復吳寶崖」
- (69) 『友聲』815(新集卷一)に「.:。昭代叢書二集、蒙允刻拙作春秋三傳攷及攬勝圖諸種、感銘五内總祈多附數、爲首荷。如已告成祈先見賜如未成書。弟尙有五經今古文攷、頗爲諸前輩許可者、容即抄寄就正求附以傳。.:」云々とある。
- (70) 前掲「張潮の書簡に見られる『虞初新志』の編集状況について」103~105頁参照。
- (71) 具體的には『虞初新志』――『劍俠傳』(卷九)・『皇華紀聞』(卷九)、『檀几叢書』――『長白山錄』(二集)・『水月令』(二集)、『漁洋詩話』(二集)、『昭代叢書』――『國朝諡法考』(乙集)・『琉球入大學始末』(乙集)・『迎駕紀念錄』(乙集)・『廣州遊

(72) 覽小志』へ乙集。・『隴蜀餘聞』へ乙集。・『東西漢水辯』へ乙集』となる。
「新城王阮亭先生郵種小品、美不勝收。因篇目已定、不獲全登爲憾、嗣當採入昭代叢書乙集以成鉅觀」